

カラフトマス 日本系

Pink Salmon, *Oncorhynchus gorbuscha*



漁獲の動向

1970 年代から沖合域での漁獲量は減少し、沿岸域の漁獲量が増加した。沿岸漁獲尾数は、1990 年代に急増し偶数年と奇数年の差も広がった。しかし近年、奇数年と偶数年で一定の豊凶が見られるものの、そのパターンの持続性は不明瞭になり、日本系カラフトマスは不安定な資源動向にある。2017 年漁期(7 月以降)の沿岸漁獲量は 1,714 トン(105 万尾)と極端な不漁となったが、2018 年漁期の沿岸漁獲量(速報値)は 8,048 トン(586 万尾)と回復した。最近 5 年間(2013 ~ 2017 年)の沖合を含む漁獲量は 3,000 ~ 14,000 トンであった。

管理・関係機関

北太平洋溯河性魚類委員会 (NPAFC)
日口漁業合同委員会

生物学的特性

- 体長・体重：尾叉長 50 cm・1.5 kg
- 寿命・成熟年齢：ほぼ全てが 2 歳
- 産卵期・産卵場：8 ~ 10 月、北海道北東部に流入する河川
- 索餌期・索餌場：夏期・北西太平洋
- 食性：水生昆虫(河川)、動物プランクトン・マイクロネクトン(海洋)
- 捕食者：鳥類・オショロコマなど魚類(幼魚)、ネズミザメなど大型魚類・おつとせいなど海産哺乳類(未成魚・成魚)

利用・用途

用途は広く、塩蔵品、生鮮、缶詰などがある。魚卵製品として、筋子(ます子)がある。

資源状態

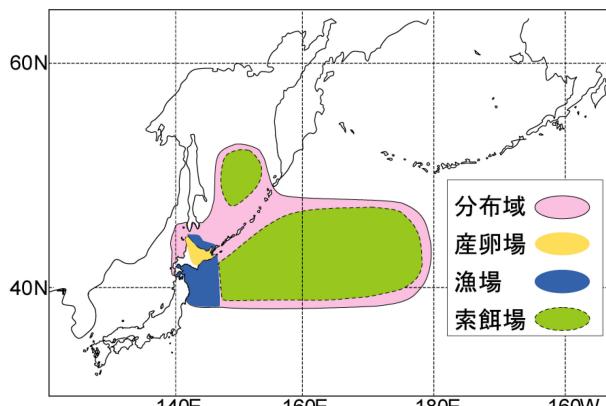
稚魚放流数は 1980 年代から約 1.1 ~ 1.4 億尾で安定しているが、来遊漁獲数(沿岸漁獲+河川捕獲)は、1970 年代後半～1980 年代前半の約 100 万尾から、1990 年代には 500 万尾以上となった。しかし、2009 年以降は、大きな変動を繰り返しながらも全体的には年々減少する傾向にある。2017 年は過去 35 年間で最も低い漁獲量に陥ったことおよび 2018 年は同一系統である前偶数年比では 72% であったことから、資源水準は低位であり、減少傾向にあると判断された。

管理方策

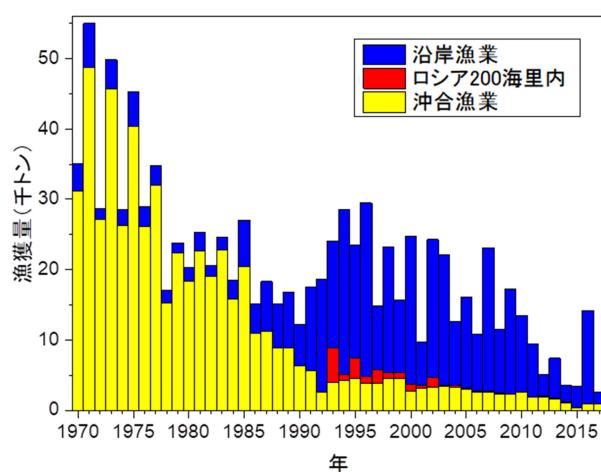
繁殖期の降水量と冬期・春期の平均気温を説明変数として作成した再生産曲線を元に来遊漁獲数を予測し、現在の資源水準が維持できる河川遡上数を残り残すという、産卵親魚量一定方策による管理を提案した。今後は、放流効果と自然再生産効果の定量的な評価を行い、索餌域である北太平洋の生物生産も考慮した資源管理方策を開発する必要がある。

漁業の特徴

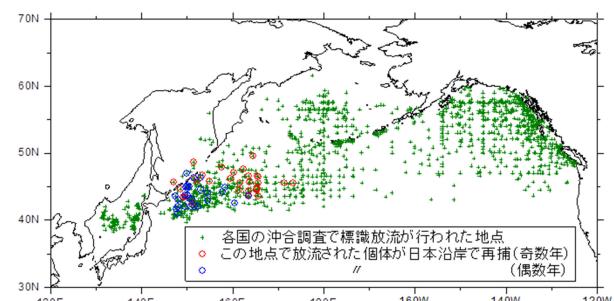
主に北海道北東部沿岸の産卵河川周辺で夏～秋季に定置網で漁獲される。広く北太平洋を回遊するが、北太平洋公海のさけます漁業は禁止されている。他国 200 海里水域内での漁獲量は不明である。



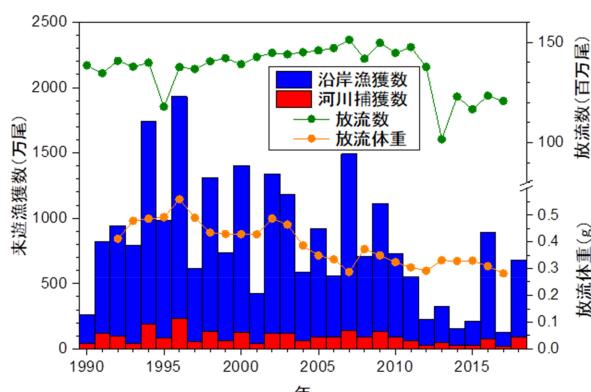
日本系カラフトマスの主たる分布域



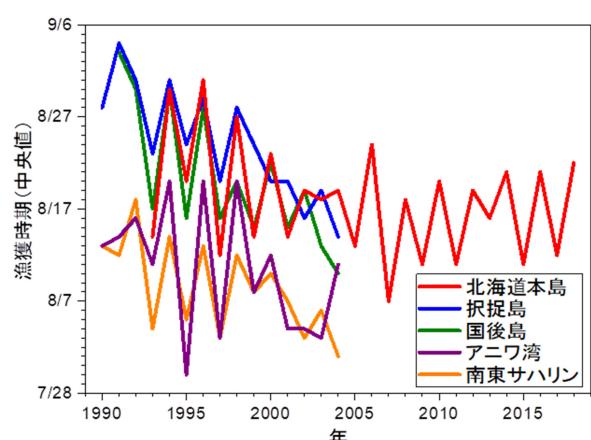
日本の漁業におけるカラフトマスの漁獲量経年変化



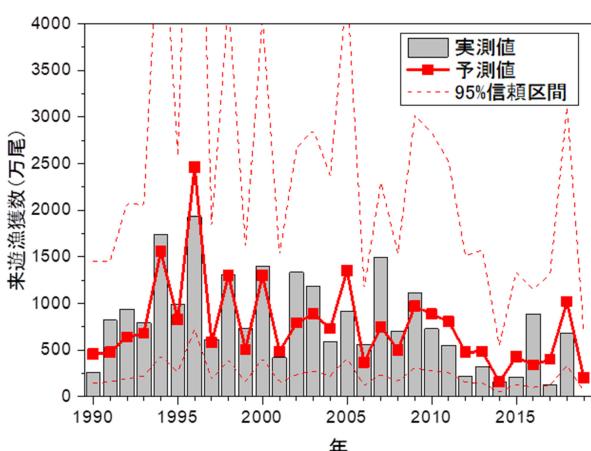
標識放流（1956～2010年）によって確認された日本系カラフトマスの沖合分布域



日本系カラフトマスの来遊漁獲数、放流数および放流体重の推移



北海道本島および周辺地域のカラフトマスの漁獲時期の経年変化



日本系カラフトマスの来遊漁獲数の予測値と実測値の関係

カラフトマス（日本系）の資源の現況（要約表）

資源水準	低位
資源動向	減少
世界の漁獲量 (最近5年間)	30.7～59.1万トン 最近(2017)年: 44.9万トン 平均: 43.3万トン (2013～2017年、 注: 日本系以外が主体)
我が国の漁獲量 (最近5年間)	約3,000～14,000トン 最近(2017)年: 2,609トン 平均: 6,200トン (2013～2017年、 注: 日本系以外も含む)
日本系カラフトマスの 我が国の沿岸漁獲量 (最近5年間)※	約1,700～12,000トン 最近(2018)年: 8,000トン 平均: 5,500トン (2014～2018年)
管理目標	現在の資源水準の維持 目標値: 平均沿岸漁獲数(過去10年) 4.4百万尾
資源評価の方法	沿岸漁獲量および河川捕獲数により水準と動向を評価 再生産モデルによる解析
資源の状態	2018年の沿岸漁獲数/目標値= 1.33
管理措置	産卵親魚量一定方策 持続的河川捕獲数 1.0百万尾 稚魚放流 1.2億尾 幼魚・未成魚期・成魚期 EEZ外、 成魚期河川内禁漁
最新の資源評価年	2018年
次回の資源評価年	2019年

※これ以外の漁期・漁法でも日本系は、他の系群とともに漁獲されるが、その混合量の推定は困難である。